

# シーア派の聖地巡礼——イラク・イランの聖墓参詣を中心に

Pilgrimages to Shi'ite Sacred Sites: Focusing on Pilgrimages to Imāms' Mausoleums in Iraq and Iran

守川知子 (北海道大学大学院文学研究科)

Tomoko MORIKAWA, Associate Professor, Graduate School of Letters, Hokkaido University

This paper presents a comprehensive look at pilgrimages to sacred sites of the Shi'ite Muslims with a focus on pilgrimages to the mausoleums of Shi'ite Imams in Iraq and Iran. This action is called *Ziyāra* (i.e. pilgrimage to tombs) in Arabic and is absolutely different from *hajj*, which is the pilgrimage to the Ka'ba in Mecca. Besides Mecca, Shi'ites pay homage to the grave of Imāms, who are their spiritual pillars. In Iraq there are six graves of Shi'ite Imāms, starting with the first Imām, 'Alī b. Abī Ṭālib (d. 661) in Najaf and the third Imam, Ḥusayn b. 'Alī (d. 680) in Karbala, two others in Baghdad and two in Samarra with the place of occultation of the last twelfth Imām. The mausoleum of 'Alī Rezā (d. 818), the eighth Imām, is located at the city of Mashhad in north-east part of Iran. Pilgrimage to the graves of the Shi'ite Imāms in Iraq and Iran was most popular through the nineteenth century during which time between 50,000 to 100,000 Iranian pilgrims visited the sites annually.

By examining Persian travelogue materials we will clarify various aspects of the pilgrimages carried out by Shi'ite Muslims during the nineteenth century. The paper will outline the season of the pilgrimages, the routes traveled, the time taken to undertake the pilgrimage, their caravans, lodging, costs and their motives. As well, manners of *Ziyāra*-pilgrimage at Shi'ite shrines will be introduced. It is characterized by special prayers to every Imāms, which are similar to the *Goeika* (Buddhist hymns) of Shikoku-Henro pilgrimage in Japan. From comparative viewpoints with pilgrimages in Japan, we can also see some activities of Shi'ite pilgrims at sacred sites who went not only to worship but also to make business and to have fun.

## はじめに

「イスラーム社会の巡礼」というと、まずはメッカ巡礼を思い浮かべる方が多いのではなかろうか。毎年、何百万もの人々がサウジアラビアのメッカ（マッカ）に集まり、カアバのまわりを周回する映像は鮮烈である。この特別な巡礼はアラビア語で「ハッジ」と呼ばれ、イスラーム暦の決まった時節にメッカを訪れ、預言者ムハンマドによって定められた様々な作法に則り、メッカおよびその近郊のいくつかの場所にお参りをするのである。ハッジは、ムスリムたちが「義務」として行う「五行（信仰告白・礼拝・齋戒・喜捨・巡礼）」のうちに含まれている。交通手段の発達していない前近代にあってハッジはきわめて困難な「行」であったがために、五行の中でもハッジのみは、金銭的・体力的に余裕のある者が生涯に一度行えばよいとされてきた。

だがしかし、イスラーム社会にはメッカ以外にも多くの巡礼（参詣）地があり、そのような参詣地へ、「お伊勢七度、熊野へ三度、お多賀さまへは月参り」という日本の俗語と同じく、メッカ巡礼以上に人々は頻繁に「お参り」を行ってきたのである。

イスラーム社会の場合、このような参詣地の多くは、「聖者の墓（墓廟）」である。スンナ派・シーア派といった宗派を問わず、「聖者の墓」は各地に点在し、それぞれの地域社会の中でにぎわいを見せている。なぜ「聖者の墓」が「お参り」の対象地になるかと言うと、イスラーム社会においては、「聖者」は神に愛された「神に近い人」すなわち「神の友」であり、神と信徒とのあいだで人々の願いを神にとりなしてくれるからである。神に愛され、神の特別な「恩寵」が降り注がれた聖者自身や、その身につけていたモノには、聖者その人の生前であれ死後であれ、神の「恩寵」が宿る。キリスト教社会の聖遺物のように、イスラーム社会においては聖者の遺物や墓にこそ神の「恩寵」が宿っており、人々はそのような効験あらたかな聖者の墓にお参りすることで、神とのあいだで「執り成し」をしてくれるよう聖者に願うのである。

このような聖者や偉人の「墓」への参詣は、アラビア語では「ズィヤーラ (*ziyāra*)」と呼ばれており、メッカ巡礼を指す「ハッジ」とは厳密に区別され、日本語では「参詣」の語が充てられている。このズィヤーラ参詣こそは、イスラーム社会のあらゆる場所で見られる巡礼（参詣）のあり方であり、聖墓参詣を抜き

にしてイスラーム社会の巡礼や、より日常的な人々の営みについて理解することはできない。本稿では、ズィヤラ参詣の中でも比較的大規模な聖墓参詣を行うシーア派のケースについて見ていこう。

## 1. シーア派とイラク・イランのイマーム聖廟

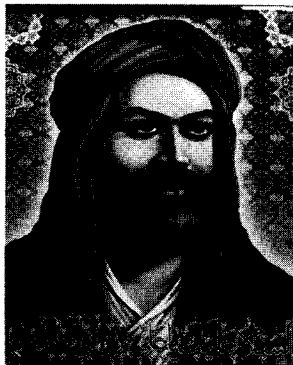
### (1) シーア派について

シーア派は、イスラーム社会全体で約1割を占める宗派である。シーア派が多いのは、イラン（人口の約9割）、イラク、アゼルバイジャン、アフガニスタン、バーレーン（いずれも人口の7割前後）などであり、イランを中心に西アジア全体に広がっている。

シーア派は本来「アリーの党派（シーア・アリー）」と呼ばれていたように、ムハンマドの従弟でありかつ娘婿のアリー（661年没）にちなんでおり、このアリーとムハンマドの娘ファーティマとの間に生まれた者たちを重視し、この一族の長を「イマーム（指導者）」と見なす。「イマーム」は彼らの精神的支柱であり、神に選ばれし預言者であるムハンマドの血を直接引くことから、「神の友」であると同時に、過ちを犯さない「無謬」の存在でもある。

シーア派の中にも12イマーム派や7イマーム派（イスマエイル派）など、「誰をイマームと認めるか」によって様々な分派があり、たとえば12イマーム・シーア派では、アリーに始まる12人のイマームを数え、最後の12番目のイマームは、父が暗殺された幼少時に「お隠れ」状態に入り、世界の終末時に再び現れ世を救う「救世主（マフディー）」として認識されている。

これら歴代イマームの中でも、初代イマームのアリーと第3代イマームのフサイン（680年没）父子はきわめて重要である。この2人を最重要視しないシーア派はあり得ない。アリーはイスラーム共同体の長たる第4代正統カリフとしてイラク地方を拠点に統治をしていたが、その最中に刺客により暗殺されてしまう。またアリーの次男のフサインは、アリーの暗殺後、政権を担うようになったウマイヤ朝に反旗を翻し、多勢に無勢の中でイラクのカルバラーの野で戦死した。預言者の孫が殉教したこの大事件は、「アーシューラー」と呼ばれる日（イスラーム暦ムハラム月10日）に起こったが、この事件を契機としてシーア派が誕生したとも言われており、また「ズィヤラ」と呼ばれる墓参詣の慣行も、このフサインの死を契機に始まったとされている。



【図1】 イマーム・アリー（想像図）



【図2】 ナジャフのアリー廟

### (2) シーア派イマームの埋葬地と墓廟参詣

フサインに象徴されるように、シーア派イマームのほとんどすべては信念を貫き「殉教」したとされている。これらイマームたちの殉教地は、主にイラクにある。初代イマーム・アリーの墓はナジャフにあり、第3代イマーム・フサインはカルバラーに、第7代ムーサーと第9代はバグダードにあり、第10代と第11代および第12代マフディーの「お隠れの場」はサーマッラーにある。そして、第8代イマームのアリー・レザー（818年没）は、イラン北東部のマシュハドという町に眠っており、イラン国内にある唯一のイマーム聖廟である。それぞれの廟は、アリー廟（ナジャフ）、フサイン廟（カルバラー）、カーズィマイン廟（バグダード）、アスカライン廟（サーマッラー）、そしてレザー廟（マシュハド）と呼ばれる。ちなみにここに挙げた以外のイマームたち（第2代、第4代、第5代、第6代）4名は、アラビア半島のメディナのバキウ墓地に埋葬されている。

西暦680年、預言者の孫のフサインがカルバラーで殉教死してから40日目に、「40日忌」としてカルバラ

一のフサインの墓に「お参り」した人物がいた。この時、「聖者」なり「神の友」なりの墓を訪れる「ズィヤーラ」という行為がイスラーム社会で初めて行われたのである。ムハンマド自身は「墓」を重視しておらず、墓参詣を決して奨励しなかったのだが、ムハンマドの孫の代になって初めて「シーア派」の中から墓参詣の慣行が生まれ、それが徐々にイスラーム社会の各地に広まっていくことになる。

アーシューラーの日のフサインの死を悼む哀悼行事の奨励とともに、シーア派ムスリムにとってイマームが殉教した場所（墓）を訪れることは、メッカ巡礼にも匹敵する神の報償あふれる行為であり、「信徒の義務」として奨励されてきた。たとえば、「アリー様を訪ね、アリー様こそ従うべきイマームだと信じる者は、至高なる神がその者のために、一回分のハッジと記録する。神かけて、その者が地獄の業火を味わうことはない」と言われている。もっとも、12代目までをイマームとみなす12イマーム派は、12人すべてのイマームを重視するが、7人のイマームしか認めない7イマーム派は、8代目以降のイマームについてはまったく重視しない。すなわち、10代目から12代目に関係するイラクのサーマッラーを参詣するかしないかで、彼らがシーア派の中のどの宗派かがある程度わかるのである。このようにシーア派内での多少の差異はあるものの、アリーやフサインなどの歴代イマームの墓への参詣は、シーア派にとって最も重要な行為として、古来脈々と行われてきたのである。

## 2. 19世紀イランのシーア派ムスリムとイマーム廟参詣

### (1) イマーム廟参詣の隆盛

シーア派イマームの墓廟への参詣が最も盛んであったのは、19世紀のイランである。なかでも19世紀後半には、年間5万人から10万人もの人々が、イラン国内のマシュハドにあるレザー廟のみならず、国境を越えてナジャフやカルバラーといったイラクのイマーム廟へも参詣に出かけていた。同時期のイランからのメッカ巡礼者が1,000人から最大でも8,000人であったことを考えると、年間10万人という数字はきわめて大きい。また当時のイランの人口が約900万人であるので、毎年人口の1パーセントほどの人々が各地のイマーム聖廟へお参りをしていたことになる。

この時期に隣国オスマン朝の支配下にあるイラクへの参詣が増加するのには、いくつかの歴史的な理由が考えられる。まず、16世紀初頭にイランで成立したサファヴィー朝（1501-1736年）の宗教政策が挙げられる。サファヴィー朝が成立する以前の西アジアは、スンナ派が圧倒的多数を占める地域であった。だがサファヴィー朝は、王家の支持基盤となる遊牧部族民らにおもねったことから、成立当初からシーア派を国教として掲げた。サファヴィー朝の時代はオスマン朝との宗派・領土対立が激しく、オスマン朝に領土を侵食される度に、サファヴィー朝は国内でのシーア派普及政策を推し進めた。シーア派イマーム廟への参詣やイマーム・フサインの哀悼行事は、サファヴィー朝下で発展した。こうして、サファヴィー朝が滅亡する18世紀初頭には、イランの大多数がシーア派信仰を受け入れるようになっていたのである。

また、19世紀中葉の1847年には、オスマン朝とイランのガージャール朝（1796-1925年）とのあいだで和議が結ばれ（第二次エルズルム条約）、この条約により、両国家間の長年にわたる領土問題が一応の解決を見たと同時に、イラン人のイマーム廟参詣者やメッカ巡礼者の安全が守られることもまた、条項で改めて定められた。19世紀には鉄道や蒸気船といった近代的な交通手段が生まれたことも旅行者が増加する要因のひとつではあるが、しかしながら後にも触れるように、イランからイラクへの参詣の場合は、鉄道や蒸気船はほとんど利用されていない。

	メッカ・メディナ	ナジャフ・カルバラー (イラク)	マシュハド (イラン)	ゴム (イラン)
テヘランからの距離	2～3ヶ月	40日	25日	3日
年間巡礼者数	1,000～8,000人	50,000～ 100,000人	50,000～ 100,000人	多数(不明)
宗教的義務	全ムスリム	全シーア派	12イマーム・シーア派	(12イマーム・シーア派)
ペルシア語旅行記数 (19世紀)	44点	20点	16点	1点

\*旅行記の点数については、現在確認し得るものを挙げている。

【表1】19世紀のイラン人による巡礼・参詣の諸相

このような政治的な安定や社会的な発展を背景として、19世紀中葉には各地への「旅行」が目に見えて増加する。そしてそれと呼応するかのようには、19世紀後半のイランでは、ペルシア語で「旅日記」が多く書か

れるようになっている。本稿では、このような旅行記史料を主に用いて当時の聖地参詣の実態を紹介している。

## (2) 国境を越える参詣者

当時のイラクはスンナ派のオスマン朝の支配下にあった。この時期、オスマン朝とイランのあいだで国境交渉が本格化し、両国の「国境」概念が明確化していくのだが、そのため、ナジャフやカルバラーの位置するイラクは隣接地方であるとはいえ、イランのシーア派ムスリムたちは「スンナ派のオスマン朝下のイラク」へ、「国境」を越えて参詣することになる。イラク側のハーナキーンという町と、ペルシア湾岸のバスラにはオスマン朝の税関と検疫所を兼ね備えた検問所が設けられ、参詣者らはここで、「査証」にあたる身分証明書を購入しなければならなかった。身分証明書には氏名や身体的特徴が書かれ、検疫所での検疫を終えた者にものみ発行された。移動の自由が制限され、管理されるようになる19世紀に、逆にその困難を乗り越えて参詣旅行に出かける人々が増えたという点については、参詣という宗教的動機から発する旅を考える際に看過し得ないことである。上掲の【表1】にもあるように、遠方への巡礼・参詣ほど、すなわち困難が増すほど、その旅について書かれた旅行記の現存数は多くなっている。

いずれにせよ、イランからイラクへの聖墓参詣は、誕生しつつあった「国境」を越えて行われるものだった点は強調しておこう。

## 3. 参詣の旅の諸相

年間10万人もの人々のイランからイラクへの旅はどのようなものだったのだろうか。

### (1) ルート

イランからの参詣者のおよそ9割は、陸路でイラクに入った。イランとイラクは陸続きなので、当然と言えば当然である。海路、船を利用するのはペルシア湾岸（インドからの参詣者を含む）からの参詣者に限られており、内陸国であるイラン人は、船旅をほとんどしなかった。ペルシア湾からイラクに入った場合、そのままティグリス川を遡行してバグダードに向かうことが可能なため、時間的には大きな節約になるが、イランからの参詣者たちはほぼ一様に陸路を利用した。このイランからイラクに向かう陸路はひとつしかなく、イラン西部のケルマーンシャーという町からイラン＝イラク国境（ガスレ・シーリーンとハーナキーン）を経て、一路バグダードへと進む古来の街道が利用されている。

### (2) 時期

毎年巡礼月（第12月）の8日から10日と決まっているメッカ巡礼と異なり、イマーム廟の参詣に特別定められた時節はない。ただし、イマームの殉教日（命日）には、比較的多くの参詣者が見込まれ、なかでもフサインの殉教日アーシューラーや40日忌には、普段以上の人々がカルバラーへの参詣に訪れた。

だが、19世紀のイラクへの参詣で注意したいのは、イスラーム法的に定められた時節がなかったにもかかわらず、イランからの参詣者の大半は、秋口にイラクに入り、冬をイラクで過ごしていたという点である。これは、農閑期との関係も考えられるかもしれないが、それ以上にイラクでは、冬が旅行のシーズンだということを重視した結果である。真夏のイラクは、気温が50度にも達する。イランもまた40度くらいになるが、このような高温の中、1日に何十キロも進むことは困難である。そのため、夏場は昼間を避け、夜間に旅することになるが、夜間の移動は、今度は盗賊に襲撃される危険性がきわめて高かった。実際、夏場の夜間の旅行者たちは盗賊の襲撃を頻繁に受けており、命の危険すらあった。すなわち、夏は旅行のシーズンではなく、温暖な冬こそがイラク旅行の最適な季節だったということである。イラン＝イラク国境の通過者が、9月から10月にかけての2ヶ月間で年間の8～9割を占めるということからも、彼らの参詣旅行は秋から冬がベスト・シーズンだったと言えるのである。

### (3) 期間

イランの首都テヘランから、バグダードまではおよそ1,000キロメートルの距離である。この距離を、片道1ヶ月強かけて参詣者たちは進む。そのため、移動に往復でおおよそ2ヶ月以上かかる計算となる。移動のために時間がかかることから、イランからイラクの聖地へ向かう参詣者たちは、イラクで2～3ヶ月と、比較的長期間滞在している。その結果、彼らの参詣旅行は、出発から帰郷まで、全体で数ヶ月から半年におよぶ長きにわたるものとなっている。

#### (4) 形態

参詣者たちは個人で旅をしたのではなく、キャラバンを組んで移動した。ここで興味深いのは、参詣者キャラバンは、出身地ごとにまとまって行動し、先に進むにつれて各地からのグループと合流し、規模を拡大していくことである。最初の村単位であれば、数名から数十名規模で始まるのであろうが、国境付近になるとその数は、数百人から時には数千人にも膨れ上がった。この点は、個々人が主体の日本やキリスト教社会の参詣の旅路とは大きく異なる点であろう。

#### (5) 移動の手段

徒歩の者、馬やラバに騎乗する者、ロバの背に結わえられた輿に乗る者など、キャラバンへの参加者は様々である。おおかた裕福な者は騎乗し、女性や老齢の者は輿に座し、一般の人々は徒歩であった〔図3参照〕。

#### (6) 宿泊

旅中では、彼らは主にキャラバンサライ（隊商宿）に宿泊する。キャラバンが1日に進む距離は大体決まっており、平地では25～30キロメートルである。街道上のキャラバンサライはこの距離に合わせて設けられており、巡礼者や参詣者のキャラバンもまた、このような街道沿いのキャラバンサライを利用した。また貧しい者たちは、キャラバンサライに宿泊せずに、外で野宿することもある。一方の富裕層は民家を借り受けることもあった。

#### (7) 費用

交通費（駄馬代）や食費、宿泊費といった旅費に加えて、オスマン朝との国境にて通行証（査証）・検疫証明書の経費やイラク国内の河川を渡る際の渡河代などが必要経費とされた。旅費は、富裕層はキャラバンサライや宿を借りたり、長旅ゆえに比較的多く家財道具を運んだりしたために相応にかかり、他方貧しい者は野宿をし、徒歩で旅するために旅費は抑えられたようである。だが、いずれの場合も、オスマン国境での必要経費は等しくかかった。そのため、旅費全体で見ると、1人あたりの参詣費用は社会的身分に応じ、おおむね半年から1年分の俸給に相当したようである。



【図3】19世紀中葉のイラン人参詣キャラバンの様子

#### (8) 動機

彼らがわざわざ国境を越えて参詣に行く理由は、史料からは明確には読み取れない。強いて挙げるならば、知人や友人が参詣したのを見聞きして自分も参詣を思い立つ、といった事例や、主君からの暇乞いの「口実」などが見られる。また、旅行記を執筆している著者の年齢層が20代と比較的若く、彼らは特に母親を連れて参詣旅行に出ていることから、おそらくは高齢の母親に頼まれるといった場合もあろう。特に女性の単独での旅行は禁じられていたので、同伴者としての若い息子は頼りになったことと思われる。

もっとも、参詣の最大の目的は「願掛け（祈願）」であり、いわゆる「祈願成就」である。イマーム廟のみならず聖者廟はいずれも「病氣平癒」に効果があるとされている。実際、イマーム廟には病人が多く、体の悪い部分と墓（もしくは墓の周りがある柵）を紐で結び、ひと晩じゅう廟内にこもって祈る姿が多く見られる。さらに、イマーム廟の場合、イマーム自らが血を流して殉教者となったことから、イマームその人は来世で天国に行くことが約束されている。そのため、自らも来世で天国へ行けるようイマームに祈願する者は多く、イマームの血で「浄められた」土に眠り、イマームにあやかって天国に行くべく聖廟のそばに埋葬される者もいたほどである。

「病氣平癒」であれ、「天国行き」であれ、個人的な動機から彼らはイマーム廟へ参詣し、さらには「他人が行くから自分も」という風潮が19世紀のシーア派の聖廟参詣にあったことは、ここで改めて指摘しておきたい。

### 4. 参詣地にて

#### (1) 参詣場所

数ヶ月かけてイラクに到着した参詣者たちは、バグダードを起点に、南方のカルバラ、ナジャフ、およびバグダード北方のサーマッラーへ出かけていく。すなわち、彼らは主に4つの町を訪れる。各イマーム廟のある聖地での滞在期間は、町によって異なる。サーマッラーはひとつだけ離れた場所にあるため、わずか3～4日と短い、カルバラやナジャフは、それぞれフサイン廟とアリー廟を擁することから、1～2週間から時には1ヶ月と、滞在期間は長くなる傾向にある。

イランからのシーア派ムスリムが参詣する場所は、上述の4ヶ所のイマーム聖廟に加えて、その途上に位置するイマームゆかりの足跡地やイマームザーデ（イマームの子孫の墓）である。ただゆかりの場所であっても、街道から遠く離れる場合は、参詣者らは訪れない。このあたりはきわめて合理的である。

さらに、イラクにはスンナ派やスーフィー聖者の墓廟があり、またユダヤ教の聖地ズルキフルがある。だが、シーア派ムスリムたちは、これらの場所は決して訪れることはなく、「観光」がてら訪れた場合であっても、「一体何のために私はここに来てしまったのか」と自問自答したり、「ユダヤ教徒たちの汚らわしさのために、気持ちにじっくりとはこなかった」と訪れたことを後悔したりするほどであった。

このような参詣姿勢からは、19世紀のイラン人シーア派ムスリムのイマーム聖廟参詣は、シーア派に固執し、特化したものであって、スンナ派やユダヤ教など他宗派・他宗教を受け入れる素地はまったくなかったことが読み取れる。すなわち、異国の地への参詣という行為によって、むしろ「シーア派である」というアイデンティティが産み出され、一層深まっているのであり、この点は「参詣」という宗教行為がもたらす心理的影響の最たる効果として看過し得ない。

## (2) 参詣作法

シーア派イマーム廟への参詣作法や手順は次のとおりである。参詣者にとって最初に必要とされることは、①「沐浴（浄め）」である。ムスリムは、礼拝を行う前には、必ず「沐浴」を行い、手や顔や足先を水で洗って浄める。イマーム廟参詣も同様に、参詣をする際にはまず浄めを行わなければならない。沐浴の後、白く清潔な服を着て、香をつけると良いとも言われている。続いて、②廟の主（すなわち被葬者）から「廟へ入る許しを得る」。これは、「今から参詣のためにお邪魔しますが、よろしいですか」と被葬者に向けて「挨拶」しているのである。実際、この段階で唱えるべき文言は、「アッサラーム（平安あれ/こんにちは）」である。挨拶を済ませると、廟の中に入っていき、墓石のある最奥部に向かう。ちなみに廟に入る際は、右足から入るよう定められている。

墓石に近づくと、③墓の周囲を「右回りにまわる」。この行為はアラビア語で「タワーフ（周回）」というが、明らかにメッカ巡礼時のカアバの周囲を右回りにまわる行為を模している。メッカ巡礼においてもタワーフを行うことが最も大事であり、タワーフこそが、メッカ巡礼であれズィヤラ参詣であれ、イスラーム社会の「巡礼（参詣）行為」を代表する動作であると言えよう。ただし、現代のイマーム廟や中規模のイマームザーデは、男女別の区画を設けているため、タワーフができない構造になっている。

そして、④墓に口づけをする。場合によっては、先に口づけをし、後から「タワーフ」を行うよう勧められている書もある。口づけができない場合は、頬をあてたり、あるいは手で墓石や柵に触れる。

⑤は参詣の最大の山場となる、「参詣祈祷文の朗詠」である。これこそは聖墓参詣の際にのみ見られる特有のものであり、四国遍路の各札所で詠まれる「御詠歌」に近いものである。ただ内容は、この「参詣祈祷文」を記した法学者によって文言に多少の違いはあるが、「あなたに平安あれ。アッラーの友に平安あれ。その友の子に平安あれ」といったもので、ムハンマドやアリーと、彼の子孫たち（イマームたち）の名前が連呼される。基本的に、呼びかける対象（被葬者）以外は、どのイマーム廟であっても内容にさほど違いはない。

なおこの参詣祈祷文はアラビア語で詠みあげるため、イランからの参詣者の多くはアラビア語を解さず、



【図4】参詣祈祷文

（現代の版なので、アラビア語の下にペルシア語の翻訳がある）

自分で詠みあげることができなかった。そのため、廟内にいる廟務めの奉公人らに、代わりに音読してもらうよう頼むことが多かった。この「代読」に見られるように、廟の奉公人らは「先達」として参詣者らに参詣の手順を示し、教え導く存在である。一方で異国から来たこのような不案内な参詣者から頂戴する「心付け」が彼らの大きな収入源でもあった。

参詣祈祷文の朗詠をした後は、参詣時には必ず行うことになっている⑥「2度の跪拝（ラクア）」（「参詣の礼拝」とも呼ばれる）を行う。その後、⑦クルアーンのヤー・スィーン章などを朗唱し、⑧個人的な祈祷や祈願を行い、同時に⑨己の罪の赦しを乞い、そして廟の奉公人たちに⑩喜捨を施し、最後に被葬者に別れを告げて廟をあとにする。参詣手順の中に、個人的な祈願を行い、罪の赦しを乞う作法が組み込まれている点が興味深いが、これもまたメッカ巡礼の作法にならったものである。

### (3) 参詣以外の活動

最後に、数ヶ月ものあいだイラクに滞在する参詣者たちが滞在中に何をしているのか、史料からわかる範囲で紹介しよう。参詣者は基本的に、滞在中は毎日、朝と晩の2回の聖廟への参詣を欠かさない。とはいえ、参詣に要する時間は30分から長くても1時間であり、かなり多くの余暇時間を持つことになる。そこで彼らが行うことは、知人や親戚との面会や会合である。おそらくこれが最も多い。知人と会う以外には、バグダードの旧市街や聖廟都市の周辺にある遺跡めぐりといった観光や、川べりでの水遊びも多く見られる。そしてボランティアとして墓廟の清掃や、聖廟内や周辺の一般墓地に眠る父祖や親戚の墓参りに訪れる。

このような墓廟や墓にかかわる「宗教的活動」の一方で、より頻繁に為されていたと思われるのが商売であり、土産物を含めた買い物である。これは、旅行記など叙述史料の記述からはほとんど実態が窺い知れないが、ペルシア語の古くからの俗諺に「参詣も、商売も (*ham ziyārat, ham tijārat*) 」というのがあり、巡礼や参詣に出かける者たちが手ぶらで往来した訳ではないことを示している。さらに国境の税関での記録などからは、「参詣者・巡礼者は免税」と訴え、金目のモノを持ちながらも隠したり値切ったりしながら関税を逃れようとした輩が多くいたことが窺われる。ちなみに、19世紀の参詣者らがイラクに持ちこんだのは宝石類やイランの特産品である絹のショールなど、軽くて高価なモノであり、ほかにも、道中での宿泊時に必要だった小さな絨毯などをイラクの聖地で売り払い、旅費の足しにしていたようである。他方聖地では、数珠や礼拝用石（モフル）が土産物として重宝された。なかでもカルバラーの土で作られた礼拝用石は、カルバラーの土地こそはイマーム・フサインの血が流れ、その血で浄められた「聖なる土」だと考えられていたため、カルバラー参詣の記念として参詣者らがこぞって持ち帰るモノであった。すでに当時のカルバラーで、あまりにも多くの土が持ち帰られるために、その真贋をめぐって議論になっていたことすら伝えられている。

また20世紀初頭のイギリス側の記録によると、バグダードには12,000人もの娼婦が存在し、聖地では性病が蔓延していたと言われている。シーア派には一時婚制度があり、聖廟都市はいずれもその聖域近くに売春宿（シーア派においては、婚資金等を法学者の前で正式に定めた場合は、短期間の婚姻関係であっても合法）があったことが知られている。これは、日本の伊勢参詣路の古市などと同様で、男性を中心に大勢の人の集まる「聖地」のもうひとつの顔であろう。

以上、簡単に見てきたが、巡礼や参詣というのは純粋な宗教的行為のみで成り立つものではなく、観光、商売、買春といった世俗的な側面も併せ持っており、このような聖俗両面性はシーア派イスラーム社会の聖地参詣においても見られるのである。

### おわりに

以上、見てきたように、19世紀のイラン人たちの参詣旅行の実態は、移動のあり方や参詣の作法などにおいて、他の社会の聖地巡礼とあまり変わらない。多少の地域性はあるかもしれないが、参詣に要する日数や距離、動機、さらには参詣旅行が遊興や商売・娯楽といった聖俗両面を併せ持っていた点など、むしろ共通点のほうが多く見受けられるのではなかろうか。

一方で、スンナ派聖地は訪れない、といったシーア派イマーム廟参詣特有の要素も認められる。メッカ巡礼を成し遂げた者が「ハーჯジー」という称号で呼ばれるように、イラクへの参詣を成就した者は、「カルバラーイー」と呼ばれる。シーア派ムスリム、なかでもイラン人にとって、「カルバラーイー」の称号は国境を越えて、何ヶ月もの時間と莫大な費用をかけて成し遂げた「シーア派ムスリム」としての「証」である。

確かに、「カルバラーの土」など参詣の証拠となる即物的な土産物もあるが、数多くの困難の後に参詣を達成した「証」は、何よりもこの「カルバラーイー」という称号であり、19世紀のテヘランやマシュハドなど、イラン各地の町において「カルバラーイー」の称号で呼ばれる人々が散見されている。

年間数万人という参詣者らは道中にあっても聖地にあっても、宗派を同じくしない「他者」の目には「狂信的 (fanatic)」と映っている。個人ではなくキャラバンという集団で行動することによって、またスンナ派政権下にあるシーア派聖地へ「国境」を越えて参詣することによって、彼らの信仰心や宗派意識はより強調され、また参詣という行為によって、より堅固になっていたからである。たとえ最初の動機が「何となく」というものであり、個々人の祈願成就が目的であったとしても、前近代の不便さの中で様々な困難の上に国境をも越えて行うシーア派のイマーム廟参詣は、シーア派であることを再確認し、その一体感を強める旅路だったと言うことができよう。

【参考文献】 守川知子『シーア派聖地参詣の研究』（京都大学学術出版会、2007年）